



Noisem⁰¹

新作「Liebestod—愛の死」

演出振付: 金森 穰

レパートリー「Painted Desert」

演出振付: 山田勇氣

りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館〈劇場〉 26-28 May 2017

彩の国さいたま芸術劇場〈大ホール〉 2-4 June 2017

Photo by Kishin Shinoyama

井関佐和子が踊った『Liebestod—愛の死』

山野博大（バレエ評論家）

2017年5月26日にりゅーとぴあで初演された金森穰の新作『Liebestod—愛の死』を、6月2日に彩の国さいたま芸術劇場で見た。これはワーグナーの楽劇『トリスタンとイゾルデ』をベースにして創られた、男女二人だけの踊りだ。井関佐和子と吉崎裕哉が踊った。金森はこのデュエットが『トリスタンとイゾルデ』の舞踊化であるとは言っていない。しかし見る側が、ワーグナーの音楽を聞いてかっさに想像をふくらませることを予測して振付けたに違いないと私は思った。

妖しい「トリスタン和音」が彩の国さいたま芸術劇場の大空間に響き渡る。タッパの高い舞台の背後には、滑らかで重厚な質感の幕が丈高く吊られている。この幕が物語の展開に重要な役割を果たす。舞台には、コーンウォールを治めるマルケ王に嫁ぐために船に乗るアイルランドの女王イゾルデの姿があった。王の甥であるトリスタンが彼女の警固役としてつき従っているのだが、この二人は恋に落ちてしまう。イゾルデは、トリスタンと共に死ぬことを決意して、侍女に毒薬を持ってくることを命ずる。ところが侍女の持ってきたのは「愛の薬」だった。船がコーンウォールに着くまでに、二人の愛はいっそう深まっていた。

マルケ王に嫁いだイゾルデのところへ、王が狩に出た隙をねらってトリスタンが忍んでくる。イゾルデと愛を語り合うところへ王が…。王の忠臣メロートがトリスタンに斬りかかる。トリスタンは自ら刀を落とし、メロートに斬られる。このあたりはほとんどトリスタンひとりの演技で処理されている。瀕死のトリスタンは背景の幕の下に転がされ消えて行く。

残されたイゾルデの嘆きの踊りとなる。井関が背後に高く吊られた幕を手でたたき、幕を波打たせると悲しみの輪が幾重にも広がり、それが嘆きの感情を表した。イゾルデが前に進み出て死の決意を示す。その直後に背後の幕が落ちて彼女の姿を覆い隠す。その幕の下で二人が立ち上がる気配

があり、あの世での愛の成就を暗示して作品は終わる。井関の渾身の演技が深く心に残った。

かつては、すべての振付者がバレリーナのことを目立たせるために、あれこれと演出を考え奉仕するのが常だった。しかし、しだいに振付者の地位が高まり、作品の創造ということに舞台の重点が移ってきた。それに伴って、近年ではバレリーナの方が振付者のためにがんばることが普通になっている。

井関の踊る金森作品を私はずっと見てきたが、常に井関は金森の作品の完成のために力のすべてを注ぎ込んでいた。彼女は自身の舞踊生活について『Noism井関佐和子 未知なる道』という本（2014年・平凡社刊）を出しているが、その中でも金森の作品のためにどうしたら役に立てるかということ、繰り返し書いている。例えば「舞台の上では“井関佐和子”ではなく、誰も見たことのない“カルメン”を見せたい」というように…。

しかし『Liebestod—愛の死』における金森は、バレリーナ井関佐和子をまず観客にアピールすることを第一と考えて作品に取り組んでいたと私は思う。井関の方は今までと変わらず“井関佐和子”ではなく、誰も見たことのない“イゾルデ”を見せようとはがんばっていた。その結果は、バレリーナと振付者の力が合体して1+1=2以上の大きな結果をもたらすことになった。

金森が、この作品を『トリスタンとイゾルデ』のバレエ化だと言わなかったのは、井関が“井関佐和子”のまま踊ることを望んでいたからではないか。全体の構成、細部の振付も、イゾルデの感情描写にウエイトをかける一方、トリスタンの方は背景と一体化して見せるという、明らかに均衡を失った配分がなされていた。『Liebestod—愛の死』は、井関佐和子のイゾルデでしか見てはいけない愛のデュエットだったのだ。



Noism1 『Painted Desert』 Photo by Kishin Shinoyama

それはもはや死ではなく

『Painted Desert』において染め上げられた空は黄昏時のようだった。壁と床は色彩によって移ろい翳り、抽象的な空間を形作る。身体は同期・離散し、壁に影を落としながら、一様ならざる時間軸が導入される。身体に追隨する影は、重なり合った色濃い影と、網膜の残像のような淡い影に変化し、時に実像よりも多弁になった。

そして盲目のバド・ドゥ。常に身体の一部を接触させたまま、危なげな均衡を保って形態を変えてゆく姿は、自在な関節を持った生物のよう。かと思えば開眼し、身体のひとつ外側の輪郭をなぞり合う。二つの身体の間にある固有の引力と斥力でも作用しているのか、まるで他者を希求する抑制のきいた欲望が顕在化したかのようなようだった。

ピッチを落とした音楽は時間の歪みを際立たせ、歌われる孤独を聞きながら、しかし一体どこへ還ればいいのか?と宙吊りにされる。やがて、微笑をたたえていた舞踊手らに虚像のような違和感を覚え、かつて同じ視界の中に蝶が舞っていたことを思い出す。刹那、夢から醒めた夢を見続けているような感覚に陥った。

現実から遊離した感覚の中でもワーグナーは容赦なく聴こえてくる。歓喜の女と末期の男のデュオから成る『Liebestod＝愛の死』では、歓びを奔出させながら、何の躊躇もなくリフトに飛び込む女の身体があった。呼応しあう伸びやかで瑞々しい身体と身体。だが男は徐々に力を失い、息絶える。男の身体と失われゆく命の感触を抱いていた女は、やがて拳を強く握り、床をだん!だん!と踏み鳴らす。言語以前のなまいぜになった感情がただ力となって表出され、手が打ち付けられた金幕に波紋が伝播してゆく。

しかし、いつしか女の表情は驚くほど穏やかになる。女にとって男の魂は、生／死に関わらず、唯一だった。一体、死はどれほどのものかというのか。死を以ってすら離断しない関係性においては、彼岸と此岸の境界を越えてゆけるのではないか。



横坂美喜(長岡市)

終盤、舞台を覆った金幕に、踊りの残り火のような峰が二つ出現する。峰の輪郭は混ざり合い、ひとつの大きな峰となった後に静かに消えた。身体を忘却し、還るべきところへ還った魂の姿だったのだろうか。



Noism2『よるのち』 Photo by Isamu Murai

50分+20分が70分にならないダブルビル

女と男、音と光、揺れて輝く大きな布。舞台上で存在を直接的に確認できるのはそれだけなのに、観客の心には様々なものが滲みこんで広がって融けてゆく。小説よりも雄弁に、絵画よりも静謐に。

曇りのない喜びに忍び寄り、不安と畏れ、葛藤と絶望、再生と再会。時計が刻むのは20分だが、飛び去るような短い時間と、永遠へと繋がるような長い時間、両極端な時の流れに同時に身をゆだねるようで、それは軽い目眩にも似ていた。

力強さの中に繊細な優しさを秘めた吉崎さんの踊りは切なく、可憐さの中に揺るがぬ芯を持つ井関さんの踊りはまばゆく、2人の姿は脳裏にあざやかな軌跡を残して消えそうにない。

解き放たれた布が全てを包み、空や風や海に転じて新たな命を生むのだろうか。『愛の死』が劇場空間に描いた、愛と死の無限のループは、この上なく、美しかった。また、見たい。何度も。

順番が逆になったが、ダブルビルの1本目『Painted Desert』。初めて見る山田さんの作品は、音も、色も、振付も、ダンサーの組合せも複雑で、眼と心の置き所がなかなか定まらない。あちこちへ連れまわされるような感覚が刺激的で、前のめりのまま50分を一息に疾走したという印象だった。何がどうと具体的に言えなけれど、凄く好きだなあ…と思っていたら、休憩中にホワイエで山田さんと遭遇、勢いで「とても良かったです!!」と訴えてしまった。舞台を見た直後に作り手の方に感想を伝えるなんて滅多にしないので、われながら

としての死ではなく、生とはすべからく死に取り囲まれてしか想定し得ない性質のものとする姿勢に他ならない。

しかし、『愛の死』最後のフェルマータ、歓喜の女が自ら金幕の下に潜り込んだかと思うと、幕を押し上げて屹立する隆起がふたつ。案の定、それらは再び距離を詰めてひとつになる。生も死も、全て肯定し、「憧れながら死んでいく」(金森穰)なら、死をもってしても、滾る想いは寸断されるばかりではなからう。四半世紀を待つて機が熟し、ここに可視化された金森穰内面の浪漫が、観る者の心を強く揺さぶる。観る度に目頭が熱くなるのも当然でしかあるまい。(2017/06/12)



下村 伸(新潟市)

“Don't think! Feel.”

早いもので、還暦を過ぎ、最近では自分の感覚がある程度は信じられるようになったか感じています。

そんな時『マッチ売り』のアフタートークで「あなたがそう見えたのならそうです」と金森さんが言い切りました。後押しをされた気分でした。感じることは人それぞれ。創り手に敬意を払い、作品の意図を探るのも大事ですが、受け手が感じたことは、本人にとっては真実です。少なくともその感覚が変わるまでは。時が経ったり、その作品を繰り返し観た場合は当然変わって行きます。今回は『愛の死』のリハを観たあと公演を1回観ました。ほぼ1ヶ月後にこれを書いています。細かい事は忘れて印象が鮮明になってきます。リハも公演も目線がフラットで至近距離の位置で観ましたが、自分も参加しているような不思議な一体感でした。

リハでは幕がなく意味不明のところがありましたが、かえって本番で幕の存在感が強調されて、幕が主役なのかなと思いました。幕、膜、間区、巻く…と連想して、やっぱり幕=膜(有機的な幕で透過性がある)だなと感じました。ラストは死と再生、子宮膜に包まれた精子と卵子でしょうか。

ビックリだった。余談…『Painted』のラスト、中川さんのバックショットが素敵すぎて…どこかに写真がないものだろうか…。

暫くは山田さんの作品に触れる機会がなく残念だが、次回公演にはダンサーとして出演とのこと。プレゼントキャンペーンのポストカードも、山田さんのメッセージ入りが届いて気分もアップ、久しぶりの『NINA』、初日が待ち遠しい。



安藤貴映子(東京都)

死に取り囲まれた生

～『Liebestod＝愛の死』～

『トリスタンとイゾルデ』前奏曲の弦に合わせて、上からのスポットライトが暗い舞台を切り裂き、浮かび上がらせるのは末期の男(吉崎裕哉)、続けて歓喜の女(井関佐和子)。逡巡も物かは、一瞬の邂逅でふたつの身体はその距離を詰める。波のように押し寄せる旋律。歓喜の女が繰り返し羽のように舞うリフト、刹那の昂揚。しかし生命のベクトルは交差する。最後の煌めきを残し、身を横たえんとする末期の男、その頭の下に、総身から生命力を迸らせる歓喜の女が自らの頭を滑り込ませて支える場面は美しくも切ない。

事切れて、転がる末期の男を飲み込むのは、此岸と彼岸を隔てる境界の金幕。その金幕、デュエットをなぞるように口を踊る歓喜の女が、悲嘆から拳で打つと、不釣り合いな程に大きく波打つ印象的な場面、背面で末期の男が引っ張る「デュエット」なのだと明かす金森穰。金幕を隔てた「碎啄の機」に世界は大きく震える。胸騒ぎを禁じ得ないその手捌きは「PLAY2 PLAY」と呼び交わして、金森穰的世界の記憶と繋がるだろう。

「バソツッ!」鉦が何かを切断したかのような短く鈍い音と共に、件の金幕がスローモーションのように崩落し、「トボス(場所)」は相貌を異にする。もはや子ども名状しがたい舞台で、顕わになるのは、生の終焉

としての死ではなく、生とはすべからく死に取り囲まれてしか想定し得ない性質のものとする姿勢に他ならない。

しかし、『愛の死』最後のフェルマータ、歓喜の女が自ら金幕の下に潜り込んだかと思うと、幕を押し上げて屹立する隆起がふたつ。案の定、それらは再び距離を詰めてひとつになる。生も死も、全て肯定し、「憧れながら死んでいく」(金森穰)なら、死をもってしても、滾る想いは寸断されるばかりではなからう。四半世紀を待つて機が熟し、ここに可視化された金森穰内面の浪漫が、観る者の心を強く揺さぶる。観る度に目頭が熱くなるのも当然でしかあるまい。(2017/06/12)



“Don't think! Feel.”

早いもので、還暦を過ぎ、最近では自分の感覚がある程度は信じられるようになったか感じています。

そんな時『マッチ売り』のアフタートークで「あなたがそう見えたのならそうです」と金森さんが言い切りました。後押しをされた気分でした。感じることは人それぞれ。創り手に敬意を払い、作品の意図を探るのも大事ですが、受け手が感じたことは、本人にとっては真実です。少なくともその感覚が変わるまでは。時が経ったり、その作品を繰り返し観た場合は当然変わって行きます。今回は『愛の死』のリハを観たあと公演を1回観ました。ほぼ1ヶ月後にこれを書いています。細かい事は忘れて印象が鮮明になってきます。リハも公演も目線がフラットで至近距離の位置で観ましたが、自分も参加しているような不思議な一体感でした。

リハでは幕がなく意味不明のところがありましたが、かえって本番で幕の存在感が強調されて、幕が主役なのかなと思いました。幕、膜、間区、巻く…と連想して、やっぱり幕=膜(有機的な幕で透過性がある)だなと感じました。ラストは死と再生、子宮膜に包まれた精子と卵子でしょうか。

もうひとつ印象に残ったのは難易度の高いリフトの連続。どちらも相当痛いのでは。「末期の男」にとっては「歓喜の女」にあれだけ向かって来られたらダメージが大きいはず。死期が早まったと思われます。それも含めて「痛み」も印象に残りました。

『Painted Desert』は最初、今回は何と感想を書けばいいんだろうなどと考えてしまいましたが、ノイズの中に突然現れた『Mr.Lonely』とラストの普通のBGMの部分を観て、あっ面白いと思ひ作品全体の印象が決まりました。私はノイズにリアリティを、普通の2曲の場面に違和感を感じました。

私が観た後に、Noism未体験の友人が埼玉公演に行くと言っていたので、「Don't think! Feel.」の言葉を贈ったのですが…ちゃんとFeelしたかな？



中山幸子(阿賀野市)

あ…、

まるで説明を拒絶しているかのような目の前のシチュエーションに翻弄されていたのは、しかし束の間だった。そこで躍動する、あるいは静止する肉体が、肉体そのものを表出しているのではなく、ある意味感情製造機として機能していることに気が付くのに、それほど時間はかからなかった。気が付いてしまえば、目の前の肉体は雄弁に己が意識を語り、その意識だけが心に直接到達していた。

これが、コンテンポラリー・ダンスか、これがNoismか。まるで群像劇のような感情表現。突然だが、しかし肅々とした規律の中で物語が進行していく。

ステージ上から次々に押し寄せる各々の意識という風を、ただただ追いかけながら、それでも時として受け入れられたような感覚を得る。しかし、「これか!」と思っ

次の瞬間には、綺麗に裏切られている。まるで、無邪気に走り回る子供の背を分かったように追いかけて回す大人のようなな、と自嘲した時『Painted Desert』は、唐突に終わった。

幕間の15分という時間は、気持ちも舞台上に乗せきれなかった悔しさを癒すには短か過ぎたのかもしれない。

それでも、「トリスタンとイゾルデ」という聴き馴染んだモチーフということで、むしろ落ち着いて臨むことができる…と思っていた。

しかし、ステージに表れた想いは、さらに凝縮されていた。金髪のイゾルデ?…いや違うのだろう。それはきっと、物語を貫く感情のエッセンス。しかも、なにも覆うものなく素肌を晒した「無垢の感情」。

純真に、無邪気に、猛々しく、そして狂おしく…。胸に届くのは、いや、突き刺さるのは、刻々と変化する愛という名の研ぎ澄まされた感情の無垢の痛みでしかない。感情とは、愛とは、これほどに攻撃的な痛みを与えるものなのか。と思った途端、肺の奥から登ってきたそれは鼻の奥から眼の裏側に回った。そして「あ…、」と思っただけの瞬間、臉から溢れ出た。

2017年6月4日彩の国さいたま芸術劇場にて人生初のNoism体験。



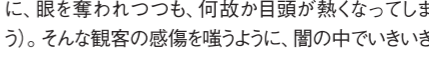
柿本欣弥(川崎市)

切々たる狂気

子どものころ、「吸血鬼」に憧れていた。夢想するのは蝙蝠を従えた、女性の姿。脳裏で物語を紡いだけりましたが、今にして思えば、未成熟な性衝動だったのやも知れない。すっかり忘れていた妖しへの憧憬が、Noism2特別公演『よるのち』を見るうちに、胸の中に蘇ってくるようだった。

県政記念館を古びた洋館に見立て、演出振付・平原慎太郎さんの書き下ろし舞踊戯曲を土台に舞うNoism2メンバー。戯曲のことばと身体の動きをシンクロさせつつ、しっかりとした発声で客席に届けてゆく。激しい動きの後、息遣いを感じさせず、俳優顔負けの口跡で台詞を紡ぐ彼女たちに、舞台人の矜持を見るようで、胸が熱くなった。戯曲の意味ではなく、ことばの響きで観る者をワクワクさせる趣向は、舞台にJAZZめいた味を加えていた。恐怖と表裏一体のすっ呆けた味わいを含め、平原慎太郎さんとメンバーとの幸福な舞台づくりの過程を想像してしまう。

少女の身体が持つ爽やかさと、滲み出す色香を、蠱惑的に見せつつも、どこか“大人になること”“そのままではられないこと”の哀しみが、胸の奥に降り積もってゆくような余韻(裾をまくり、素足を晒しての群舞に、眼を奪われつつも、何故か目頭が熱くなってしまふ)。そんな観客の感傷を喰うように、闇の中でいきいき



あおやぎ



Noism2特別公演2017『よるのち』 Photo by Isamu Murai